

## 近世の教学・教育機関とその理念：近代化への二つの途

丸山， 雍成  
九州大学九州文化史研究施設

<https://doi.org/10.15017/1560301>

---

出版情報：九州文化史研究所紀要. 39, pp.277-308, 1994-03-30. Research Institute Cultural History, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



# 近世の教学・教育機関とその理念

— 近代化への二つの途 —

丸  
山  
雍  
成

## 目次

- 一 はじめに
- 二 幕藩領主の教学、教育機関  
— 上からの途と、その軌跡 —
  - a 昌平坂学問所 付、開成所ほか
  - b 藩校
  - c 郷校・教諭所
- 三 下級武士・豪農商等による教育機関  
— 下からの途の栄光と、その挫折 —
  - a 私塾
  - b 寺子屋
  - c その他
- 四 近代的学校制度の施行と在地の動向  
— 埼玉県蕨郷学校の変遷を事例として —
- 五 結びにかえて

## 一 はじめに

近代とは何か。それは、資本主義をうみ出し市民社会や国民国家を形成させた、欧米諸国による世界の一体化、と  
いうことができる。このことは又、欧米諸国にとっては自由と人権の獲得、人間の解放の過程であったが、他方、そ  
れ以外の地域にとつては、欧米諸国への政治・経済的従属、自らの歴史発展の遮断、そして貧困と差別の苦しみのは  
じまりを意味した。<sup>①</sup>十八世紀以降、東アジア・東南アジア世界が欧米諸国の植民地・半植民地へと変貌するなかで、  
日本が危くも虎口を脱したのは何故か、さらに「万国対峙」の緊張の下、日本が「脱亜入欧」をなしとげた歴史的  
条件は何なのか。これは誰しも考えるところであろう。

こうした問題について、かつて日本では所謂「日本資本主義論争」において、明治維新の国際的・国内的条件をめぐり  
激しい議論、多角的な検証がおこなわれてきた。<sup>②</sup>しかし、そこでは殆ど問題関心の外におかれた本題目のような  
アプローチの仕方、なお必要ではないかと思われる。ここでは所謂「鎖国」体制の下、封建社会の胎内において、  
幕藩領主層の教学・教育内容や一般庶民の教育の在り方のなかに、学問・教育の近代化への萌芽がいかに育くまれ、  
その方向性があたえられたか、また、その両者の対抗関係の存否如何と、それが存したとすれば近代教育にいかなる  
特質を付与したか、が検討課題となろう。

## 二 幕藩領主の教学・教育機関

—上からの途と、その軌跡—

a 昌平坂学問所 付、開成所ほか

近世には、所謂官・公・私立の教育機関（幕府の昌平坂学問所、諸大名の藩校、その下での郷校・教諭所、私塾・寺子屋など）があったが、その最高の地位に立つのが幕府の教学機関——昌平坂学問所である。慶長六年（一六〇二）徳川家康は、伏見の円光寺を学校として僧俗に学問を勧めたが、その孫家光は寛永七年（一六三〇）林羅山に江戸上野の忍ガ岡の地五三三坪を下賜し、その興学の資とした。<sup>(3)</sup>それは羅山が、將軍家康以来、宋学（朱子学）をもつて幕府の教学の基礎をきづくに功勞があつたため（將軍家康・秀忠・家光・家綱の四代の間、幕府の教学を管掌する）、当初は忍ガ岡聖堂と称し、その後ながく家塾としての性格を保持した。家綱の時、これを弘文館と称し、経科・読書科・文科・史科・倭学科の五学科に分かれ、幕府より種々援助するところがあつたが、五代將軍綱吉は元禄三年（一六九〇）弘文館を湯島昌平坂の地に移して、宏壮な大成殿をはじめ二〇数棟を建設、湯島聖堂と称した。そして彼自ら聖堂に詣でて、経義を講じたといふ。<sup>(4)</sup>

実学奨励で有名な八代將軍吉宗は、大成殿近くの東舎（講堂）での講書に、武士・庶民の別なく聴講を許可した。<sup>(5)</sup>ここには、特定將軍の指針とはいへ、幕府のひらかれた学問・教育政策の一端を垣間見ることができぬ。

しかし、その後、林家の学問的權威の低下とともに聖堂も頽廢の一途をたどつた。寛政二年（一七九〇）十一代將軍家齊は老中松平定信の言をいれ、柴野栗山・岡田寒泉を儒官として林家の学政を補佐させ、規約を改訂するなどしたが、また尾藤二洲・古賀精里を加えて講義の充実をはかつた。特に同四年、幕府は美濃岩村藩主松平乘蘊の子衡を

林錦峯の養子とした。その林述齋は、学政の評定に努め、四書・小学を必修の学として、工商のうち篤学で本業を抛つほどの者は生徒の末席に加えることもしたが、その特色は朱子学以外の講究を禁じたことであった(寛政異学の禁)。さらに、同九年の学校制度の改革では、学問所(昌平坂学問所)と改称、林家の禄高三〇石に一〇〇石を加え、士庶の別を厳にして工商などの出身者を追放した。ここに従来、幕府の保護の下で半官半私の形態で連綿とつづいた林家の家塾的性格も、大きく払拭されて、純然たる幕府の官学として制度化されるに至った。十一年、幕府は新廟を建て、学校を増築したが、その面積一万一六〇〇余坪、大成殿のほか庁堂(座敷)・講堂(稽古所)・学舎(寮)・儒官ら宿舎・馬場・矢場などが整備されている。そこでは林述齋を総教とし、儒官四、五人と教授方出役がいて講義、輪講をおこなうが、その内容は四書・五經・小学の句読で、学舎では毎日輪読・会読があつて、儒官・教授方出役とも旗本・御家人によつて多く占められ、生徒にはこのほか諸大名の家臣(藩士)等も参加できた。なお、寮には寄宿寮・書生寮があり、前者は寛政以降三〇人に限つたが、天保年中に四八人、後者は三九人が入寮した。<sup>(6)</sup>

右にみる寛政異学の禁は、朱子学以外の、主に古学派・折衷学派以下を排除したものであつて、昌平坂学問所の学風から清新性を一掃する側面のあることは否めない。古学派は、当時の朱子学に道教・仏教思想の混入ありと批判して、孔子の著述そのものに即して儒学思想への復帰を説く伊藤仁斎の古義学(堀川学)派と、これに反撥して、聖人の書いた六經や孔子の言行を記した『論語』を古言で帰納的に解釈することにより聖人の道を明らかにし、人の性情を道から解放する考え方の荻生徂徠による古文辞学(護園学)派とからなる。<sup>(7)</sup> いずれも元禄期以降の自主性をもつ学派であるが、特に後者にあつては、近代的思维方法の成立が認められ、その政治・社会改革論においては幕府絶対主義の下での「平均」化を志向するものとする学説もある。その根底には、学芸その他の自主性、各領域にわたる伝統への反抗、換言すれば自由主義の内包があるといつてよい。一方、折衷学派は、程朱学のみならず漢唐の訓詁学をも採り入れた榊原篁州・片山兼山らの学派で、そこでは先験的なものや先入観に拘泥せず批判的に經書を究明するとい

う、学問研究の自由を尊重する点に特徴があり、その学派から狩谷掖斎らの考証派をうんだ。儒学を、哲・史・文・文献学などに独立発展させ、学問の近代化に果たした役割は無視できない。

なお、陽明学も異学の禁の範疇に入ることはいうまでもないが、天保十一年（一八四〇）昌平坂学問所の儒官に任用された佐藤一斎などは、朱子学を奉ずる一方、王陽明を欽慕して、「陽朱陰王」の誹りをうけながら、その門下から陽明学を信奉する英才を輩出させている。幕末期には、折衷学派に近い安積良斎、折衷考証派の安井息軒なども儒官となっている。こうした現象は、純粹のすぐれた朱子学者の不存在ということのほか、すでに国学・洋学など新しい学問の台頭が著しかったからである。

幕府の学校としては、昌平坂学問所以外に、甲府の徽典館、駿府の明新館、日光学問所、江戸の和学講談所・洋学所・医学館・陸軍所・海軍所などがある。このうち、徽典館は、甲府勤番の旗本・御家人の子弟を教授するため寛政年中に設立、天保十四年（一八四三）に再築したが、これは昌平坂学問所の制に近く、その教授方のうち各年交代して四書・五経・小学を素読生に教え、さらに輪講・会読をした。ここでは一般庶民の志願者にも入学を許可し、講義は二・七の日に幕臣、三の日に庶民有志、また毎日の別席の講義には武士・庶民の別なく聴講できた。この館内には医学所も設けられ、勤番医や町村医が医書を講じたという。明新館は、安政五年（一八五八）に設立、同じく昌平坂学問所の教授方一人が派遣され、旗本・御家人・藩士のほか農商の者にも入学を許し、日光学問所でも、在地の旗本等や輪王寺僧・祠官に加えて農工商の有志に教えたが、文久二年（一八六二）から昌平坂学問所の教授方が派遣された。和学講談所は、堀保己一が寛政五年（一七九三）に設けたもので、幕府はその建設のため別地を下賜して大学頭林家に属させ、国書調査を命じた。

洋学所は、日米和親条約締結の翌安政二年（一八五四）に設置され、同三年には蕃書調所と改称、箕作阮甫らをして蘭学を教授させたが、万延元年（一八六〇）には英・仏・独・露の各学を加え、文久二年（一八六二）洋書調所、翌

三年には開成所と改称、慶応元年（一八六五）これまで林家に属したのを陸軍奉行、翌年には外国奉行の所管とした。そこでは前記の五学科のほか、天文学・地理学・窮理学・数学・物産学・化学・器械学・画学・活字印刷術などを、外国教授法によって教えた（他に、幕府は文久三年、長崎に語学所（済美館）を置き、清・蘭・仏・英・露の五カ国語を講習させ、慶応二年には横浜に英仏学伝習所を設けている<sup>12</sup>）。明和二年（一七六五）幕府は、多紀孝元に江戸神田の天文台旧地を貸して漢方の医学館（躰寿館）の設置を許し、また町屋敷を下賜し、学館維持の資金を与えているが、幕末期には伊東玄朴らが建設した西洋方の種痘館に対し、文久元年資金を援助して規模を拡大、教授職において西洋医学所と改称さらに医学所と改めた<sup>13</sup>。洋学所・医学所ともに、後年の東京帝国大学の前身となった。陸軍所は、安政三年設置の講武所において銃隊を編成し刀・槍・砲・水練の各術を習わせたのを、慶応二年に陸軍奉行の管轄の下で砲術を習わせたもので、翌三年には撤兵士官学校を設けて、フランス人教師に教えさせた。海軍所は、講武所のなかの軍艦教授所を、慶応二年に海軍所と改称して海軍奉行の管轄下におき、イギリス人教師に海軍術を教授させたものであるが、また、元治元年（一八六四）には摂津神戸にも操練所を設けて、航海術の習得にあたらせた<sup>13</sup>。

このように幕府が西洋の学術研究などの中心となったのは、幕末・維新期の短期間といつてよいが、これが後年の東京帝国大学や陸海軍などをはじめとする、近代化推進の役割を果たす原動力の一つとなったことは否定できない。

## b 藩 校

諸大名の藩校は、多くその藩地にあるが、特定藩では領内枢要の地に支校をおき、また江戸藩邸にも設ける例もみられた。藩校の創設は、寛永→天和年中（一六二四→一八三）わずか七校であったのが、その後は徐々に増加の傾向を示し、特に天明→享和年中（一七八一→一八〇三）は最盛期で、文化→明治初年（一八〇四→七一）がこれに次ぐものとなっている<sup>14</sup>。藩校の形態としては、私塾ないし家塾型（藩内の藩士・浪人や僧侶・神官、または富農商層の私塾・家塾を、藩

の保護・監督下において半官半私的性格の教育施設としたもの、講堂型（藩主が城内や江戸藩邸の書院・講堂に儒者を招聘して月並講釈したものが発達して学校となったもの）の両形式に分けられ、<sup>(15)</sup>これが従来の家塾的・月並講釈の形態から脱却して、文武両道の教育、初等・高等教育の諸学科・課程を統合した藩立の総合大学の観を呈するようになるのは、天明以降のこととされる。尾張名古屋藩の明倫堂は、藩祖徳川義直が寛永年中設立した最も早い時期のものというが、この講堂型の藩校が名実ともに学校教育の制度を整えたかたちで出現するのは天明三年（一七八三）のことであって、幕府の昌平坂学問所や全国の諸藩校の発達過程と軌を一にするものがある。それと同時に、幕末期まで学校組織の整備をみぬままのものもあつたことは勿論であらう。<sup>(16)</sup>

藩校では、文武両道を究めることを主眼目とするが、このうち文道は四書・五経などの儒教的教育、武道は剣術・槍術・弓術・砲術・水練術と兵学の習得ということになる。ここで学科名を列挙すると、漢学・習字・算術・医学・洋学・皇学の各科である。これによれば、藩校では修身齊家・治国平天下という為政者としての道徳的人間の形成をめざす一方、実学的科目を加えているのであつて、<sup>(17)</sup>ここには八代將軍吉宗や寛政改革を推進した松平定信らによる実学、文武奨励の影響を見てもとることもできよう。

諸藩では近世前期以降、財政窮乏の打開に努め、藩政改革や綱紀肅正などを実施してきたが、その際、藩政担当の人材養成が緊急の課題となり、藩校教育の重要性が認識されるに至つたのである。その後、日本列島を圍繞する欧米列強の重圧は海防の必要性を認識させ、諸藩が富国強兵・人材養成策を推進する前提として、藩校の教育内容の充実が必須の要件となつた。そこでは、洋学―それも砲術や造船・航海術、究理学・地誌など―の研究と、皇学の台頭が著しかった。<sup>(18)</sup>このことは、従来の儒教的な学問・教育を、世界的視野に立つ近代的なそれへと転換する基礎が形成されたことを意味している。

まず、洋学の発展から見てみよう。洋学とは、幕末にオランダ以外の欧米諸国との交渉が開始され、その言語や学

問・文化等を撰取したため、蘭学で一括できず、西洋の学として総称されたものをいう。<sup>(19)</sup> 具体的には、蘭・英・仏・露の四カ国語と、医学・天文学・数学・窮理学・博物学・兵術・造船術・測量術・器械学その他、西洋の科学術をふくむ広域の学問・技術をいうが、それは西洋医学の研究によって最初に蘭学がおこり、次いで軍事技術の導入となつて一大興隆をみた。藩校で洋学を正科としたのは、全国で四〇余藩を数えるが、その盛んなのは弘前・仙台・松代・金沢・福井・大野・萩・徳島・高知・宇和島・福岡・佐賀・大村・中津・鹿児島<sup>(20)</sup>の諸藩であろう。藩校ではないが、松前藩の後の松前奉行の学問所なども特例として加えておきたい。以上のうち、洋学の最たるものは、明治維新の主體勢力である萩・佐賀・鹿児島<sup>(20)</sup>の各藩である。

〔秋藩〕この藩では、享保四年（一七一九）明倫堂で学校体制が整備され、当初は古文辞学（徂徠学）、のち朱子学となつたが、藩主毛利敬親が天保十一年（一八四〇）、医学校好生館を設立、西洋医術などを学ばせ、安政三年（一八五六）には博習堂を建てて、大村益次郎に教授および翻訳をさせた。生徒数は四十余名。英・蘭学および数学を基礎教養として、軍艦運用術・砲術・造船術などを講習し、近代的教育をおこなつた。ちなみに、博習堂の科学科目は、記誦（字体・字訓を知り、句説をつける）・解義（語意を理解する）・兵学（海・陸二科に分つ）・理学（天理・万物の性情を推察する）・分析学（物質の精粗・離合集散を検証する）・度学および数学（天度・地面の経緯、数量尺度の積算など）・天学（曆時、陰陽変理の道を知得する）・地学（自然・人文地理の学）である。<sup>(21)</sup>

〔佐賀藩〕この藩では、近世初期から福岡藩と一年交代で長崎警備の任にあたる関係上、海外事情に詳しく、早くから西洋の科学技術を採用して、洋学の研究に先鞭をつけた。特に、藩主鍋島直正（号は閑叟）は、率先して洋学を導入し、天保五年（一八三四）医学所好生館を設けて西洋医学を奨励したが、嘉永五年（一八五二）には精練方を置いて化学薬剤や器械の研究をさせ、反射炉の建設、新式大砲の鑄造、軍艦建造などをおこない、海軍所を設けて蒸気船の運用、海上砲術の研修などにあたさせた。同藩の蘭書購入目録をみると、物理・化学・理学・造船・航海・

火術など多彩で龐大な数にのぼる。これを秘事取調方なる役所で翻訳・研究して実地に應用するなど、近代化への大きな躍動ぶりがうかがわれる。<sup>(22)</sup>

〔鹿兒島藩〕この藩では、藩主島津重豪が安永二年（二七七三）幕府に倣い、聖堂を中心とした藩校造士館と演武場を建設する一方、医学院を設けて、医療の講習・討論・読会をひらき、庶民にも開放して参加を許した。さらに、明時館を設立して天文・暦数を研究させるほか、重豪自らも中国人や蘭人と交際し、清国語を研究して『南山俗語考』十二巻以下、多数の著書を刊行するなど、文化百般に活躍した。嘉永四年（二八五二）藩主となった島津齊彬は、かつて曾祖父重豪に随つて長崎のシーボルトに学び、洋学をきわめて、その識見宏大、当代一の英明大名と称された。齊彬は安政四年（二八五七）造士館・演武館に告諭一〇カ条を下達したが、その第一条では、学問の目的が修身齊家・治国平天下の道理を究めることにあるとし、また第九条では、西洋學術の長所を採つてわが短所を補い、上下一致して国威を發揚すべきことを述べ、和漢洋三位一体の教育方針を示している。そして、著名な集成館を設置して、文明開化を先取りする生産事業をはじめ、桜島の造船所では日本最初の近代的な軍艦昌平丸を建造、これを幕府に獻ずるなどした。他方では、反射炉の築造に成功、さらにガラス・洋式朱粉・硝酸・塩酸を製造、電線を開通し、翻訳書を出版するなど、西洋の近代技術の導入と実用化に大きな役割を果たした。次いで、島津忠義も、万延元年（一八六〇）達士館を設立して中国語の研究に供させ、元治元年（二八六四）には開成所を新設して陸海軍諸学科の教育をおこなわせ、すぐれた軍事技術家や英学者をうんだ。島津久光の時、慶応元年（二八六五）鹿兒島藩の青年一九人が変名してイギリスに留学、その新知識は同藩のみならず、日本の近代国家形成に寄与するところ大なるものがあつた。ちなみに、このなかには後の明治政府の文部大臣森有礼もふくまれる。<sup>(23)</sup>このように英邁な歴代藩主の下、人材の養成所たる造士館や各研究所が明治維新へと導いた役割は、いかに評価してもし過ぎるものではない。近代に入り、他の藩校の多くが中学校として位置づけられたのに対し、造士館が第七高等学校として

帝国大学の予科となつたのは無理からぬところといえよう。

これら三藩に較べると、海南朱子学の伝統をひく高知藩では、弘化二年（一八四五）ごろから漢洋折衷の医学を教え、慶応二年（一八六六）に洋学所ができるというふう<sup>(24)</sup>に、洋学の摂取にやや後れがみられる。一方、隣藩宇和島では、藩主伊達宗城が西洋文明の摂取に努め、嘉永元年（一八四八）脱獄中の蘭学者高野長英を密かに招聘して訳述・講義にあたらせ、大村益次郎ら蘭学の大家を次々に招いて蘭学修業所を設立するなど、西洋学術の導入に顕著なものがあつた。<sup>(25)</sup>九州の中津藩では、藩校進脩館において古学派が、文化年中（一八〇四―一七）以降は国学が発達したが、蘭学の発展は早く、安永三年（一七七四）完成の『解体新書』に関与した前野良沢がその基礎をきづき、文政五年（一八二二）には『中津辞書』（蘭語訳撰）が出版され、多くの洋学者をうんだ。この中から、江戸中津藩邸の洋学教授であり明治の先覚的思想家となつた福沢諭吉が出現している。<sup>(26)</sup>福岡藩では、藩主斉清・同長溥らが幕末期に蘭書の翻訳・出版をおこない、化学工業・西洋兵術の研究に従事させるなど顕著なものがあつたが、<sup>(27)</sup>尊王倒幕の政治的動向のなかで後れをとつてしまった。

東北の仙台藩も同様で、文化八年（一八一二）医学館を設け、文政年間（一八一八―二九）には全国諸藩に先駆けて蘭方科を、さらにロシア語科を新設するとともに、西洋の軍艦・大砲など科学技術の導入に努めているが、<sup>(28)</sup>明治維新の主導的な政治勢力とはならなかつた。山間部の弱小藩ながらも、藩政改革の基盤を教育におき、諸藩に率先して洋学を採用したのは越前大野藩主土井利忠である。彼は天保十四年（一八四三）藩校明倫館を創設し、「儒魂洋才」をモットーに洋学を導入して正科とし、蘭学所を設けて「幼稚の子弟八歳より漢学、十一歳より蘭学各業に就き、日夜懈怠なく勉勵すべし」と奨励し、緒方洪庵の弟子、伊藤慎蔵を大坂から招いて、武士・庶民ともに学ばせた。このため各方面からの来学者が多く、近くは大聖寺・勝山・鯖江の各藩、さらには丹波・丹後・江戸・肥前の各地域におよんだ。さらに、安政元年（一八五四）には『海上砲術全書』一五冊、『英吉利文典』など数種の翻訳をしたが、この後書

は英蘭書として有名で、英語研究の先駆けとなっている。<sup>(30)</sup>

皇学は、従来の和学・国学または日本学を、新名称で藩校教科に導入したものである。<sup>(31)</sup>これが藩学において最も早く教授されたのは、寛文元年（一六六一）会津藩日新館の神典科においてであるが、<sup>(32)</sup>藩校の教科となったのは安永二年（一七七三）の鹿児島藩造士館、同六年の佐伯藩四教堂以下、天明・享和年間（一七八一―一八〇三）九校、文化・天保年間（一八〇四―四三）二一校、弘化・慶応年間（一八四四―六七）三二校、明治四年まで二一枚といった具合で、<sup>(33)</sup>このうち最も興隆したのは秋田・名古屋・彦根・和歌山・津和野・福山・高松・中津・平戸・大村・熊本・鹿児島諸藩であった。これは特に幕末期における尊王攘夷思想の展開と密接に関連し、儒教主義的教育観の修正をめざすものであるが、大村藩の場合など尊王政策の強化が幸わいし、明治維新後は政府に高官に任用されたり、政治家・教育家として近代国家の形成に寄与したといわれる。<sup>(34)</sup>

以上の洋学・国学の摂取は、藩学のなかでも新時代の要請にもとづくものであったが、藩校が封建教学を楨榘とする支配秩序の維持を目的として設立された以上、幕末期まで依然として儒学中心に習字その他を教科内容にとどめるもの存在したことは何ら不思議ではない。しかし藩校が、新旧の諸学問を一部または多彩に採りまじえながらも時代の趨勢に対応できたのは、それが単に武士階級のみならず一般庶民に対して広く門戸を開放し、学問・教育の普及を国民的課題として推進する方向性がみられたからであろう。

先に、鹿児島藩主島津重豪が医学館における講習等に庶民をも参加させたと述べたが、これは特異な例ではない。すでに早く高知藩では、藩政改革に多大の功績を挙げた執政野中兼山が藩士・一般庶民に学問を奨励し、寛文元年（一六六一）の布令で次のように示達している。

百姓の子供、男女八、九歳にも成候は、面々の事を仕習はせ可申候、惣て今迄は庄屋或は手前富貴なるものは、子供に物を書せ、算用をも為仕候へ共、貧しきものは存寄も無之と相見候、貴賤万民共に貧富は有之候へ共、

人々の心ざしにより如何様の芸能をも調ふる者に候ま、随分物を書き算用は習候へと、御申付可有之候前・後略  
ここでは、従来は庄屋や富貴の者が自分の子に書・算用を教え、貧乏の者はそうでなかったとして今後の奨励を命  
じているが、さらに続けて、読み・書き・算術が上達した者は「一かど取立可申事」と、人材登用の途をひらく旨を  
明示している。<sup>(35)</sup>同じ頃、岡山藩でも、池田光政が寛文六年（一六六六）仮学館を設立したが、その規則には、家中の  
嫡子は八―二十歳のあいだ入学は望み次第、とした上で、但し書で「廿歳以上の者、並庶子、庶人たりとも品に寄り  
可令入学事」と、一般庶民の子弟にも門戸を開放した。<sup>(36)</sup>金沢藩は寛政四年（一七九二）明倫堂を創設したが、和漢・  
医学など十二科目の多彩さのなかに、「為<sup>(37)</sup>四民教導」…諸士は勿論、町在之者迄も志次第学校江罷出、習学可仕候」  
とし、特に町在の子弟で貧窮者には食費の補給まで配慮している。<sup>(37)</sup>仙台藩の養賢堂も、文化・文政期以降は幕府の昌  
平坂学問所流の朱子学でありながら、その講学所・日講所では一般庶民に門戸開放の方針を示した。<sup>(38)</sup>文政二年（一八  
一九）福井藩の正義堂が、藩士にかぎらず、僧俗貴賤の者の入学を許可したのは、藩主松平治好の教育政策によるも  
のであった。<sup>(39)</sup>

これを全国的に概観すれば、庶民入学の許可・不許可の藩校数は相半ばするというよりはむしろ、前者が優位を占  
めるといってよい。もともと、明和三年（一七六六）創設の篠山藩振徳堂では、それ以降をつうじて庶民の入学者は  
わずかに二、三人程度、また烏山・黒羽・豊橋・大溝の諸藩もほぼ同様で、<sup>(40)</sup>理念と現実化には大きな乖離がみられたの  
である。

教育の近代化の指標のひとつに、女子教育の在り方があげられよう。当時、女子は習字・歌詠・音曲・茶花・諸札  
を学ぶことが主で、漢籍を読み、詩文をつくるなど稀であつて、却つてこれを戒しむる風があつた。<sup>(41)</sup>こうしたこと  
から、藩校における女子教育は非常に低調であつて、わずかに松江藩が文久三年（一八六三）文武館の館外四カ所に  
女学校を設けて女子教育に乗りだし、佐土原藩でも明治三年（一八七〇）女学校を設置したが、廃藩置県で中断した

のが目につく程度である。<sup>(42)</sup>

最後に、幕府倒壊後の静岡藩々校および沼津兵学校にふれたい。明治元年（一八七八）八月、徳川家達は、前將軍慶喜とともに駿府城に入り（禄高七十万石）、翌二年八月には静岡藩と称した。同年正月、駿府城内に学問所が開かれ、また小学校や伝習所が設けられたが、これに先だつ前年九月の布令には、「御国学・漢学・洋学共御開相成候に付、有志之者は身分の貴賤に限らず、出席修業致候様」にと奨励し、また同十一月の洋学開校に関する布令では、「府中学問所に於て、英吉利・仏蘭西・和蘭・独逸四ヶ国之学問、来十五日より御開相成候に付、御領地内武家・社家・出家・百姓・町人、並其子弟・厄介・召仕等に至る迄、志ある輩は学問所へ罷越、稽古可致事」とし、なお書物のない者には取計らつてやる旨を述べている。まことに、四民平等・機会均等の標榜を地であったものであるが、これは翌三年正月の「小学校掟書」四一カ条とともに、近代日本の学校教育の先駆けといつても過言ではない。<sup>(44)</sup> 伝習所では、米人クラークを化学教師として招聘、理科と語学を担当させて、理化学実験などを実施させた。<sup>(45)</sup>

一方、同元年十二月に開校した沼津兵学校は、後年に文明開化の先達として著名な西周（開成所教授）以下、海外留学の経験のある人びとを多く教授とし、西洋の科学技術と軍制にもとづく近代的軍事教育をおこない、当時全国に名声を轟かせていた。これは、四年の廃藩置県による静岡藩の消滅と軌を一にして陸軍省直轄となり、東京に移転する。<sup>(46)</sup>ここに静岡藩の学問所および沼津兵学校が維新以降の近代化に果たした一端がうかがわれる。

### C 郷校・教諭所

近世の武士・庶民の教育機関として、昌平坂学問所や藩校と寺子屋との中間的機能をもつ、郷校・教諭所の存在を無視することはできない。その経営者は、㊶幕府・代官や藩主・邑主、㊷官公民協力、㊸民間有志、㊹町村または町村組合、に大別されるが、文化・文政期（一八〇四〜二九）には㊶が圧倒的多数、天保年間（一八三〇〜四三）から㊸が

優位を占めるものの、この時期から②も新たに出てくる。さらに安政―文久年間（一八五四―一六三）からは新形態の③が出現、これが明治初年に④・⑤にせまる、という傾向がみられる。ここでは上からの途としての、④・⑤を中心に見てみよう。

幕府は享保初年、三都に一般庶民の教育機関を設置しようとして、江戸では深川の地を菅野彦兵衛に下賜して教授所を、大坂では中井梵庵に懷徳堂をそれぞれ建てさせて、経義・文章の別なく教授させたが、くだつて天保十三年（一八四二）にも江戸麴町に学問教授所を建てて、教授者には手当などを給付した。文久年中（一八六一―三）には小学校を江戸市中・郡邑に設けようとしたが、これは実現しなかったという。<sup>(48)</sup>一方、地方都市では、甲府の徽典館、駿府の明新館、日光学問所、長崎聖堂などが、その地の武士や庶民の学問教育の場となった。それは幕藩体制が動揺を激しくする寛政期以降に題著であるが、地方の在郷町なども共通している。例えば、幕府は甲斐天領の各郡に郷校・教諭所などを設置させたが、それは在郷商人や豪農など有志者の寄金に依存し、幕府の許可を得た者が近傍町在の子弟に経史の一斑を教授したのである。<sup>(49)</sup>このことは天明期以降の荒廃した農村の復興策、新出現の豪農を中心とする本百姓体制の維持策の一環として、単なる法令示達のみならず庶民教諭の実践の場という役割を、郷校・教諭所に担わせたことを意味する。かの有名な所謂「慶安御触書」（「百姓身持之覚書」）の前身とみられる「百姓身持書」が出現するのは天明二年（一七八二）のことであるが、<sup>(50)</sup>甲斐の代官山本大膳などは、文政六年（一八二三）郷校由学館において武士・庶民とも「聴勝手次第」と広く門戸を開放し、その後の転任先で石和教諭所を設置して「教訓三章」を刊行、くだつて天保七年（一八三六）には「五人組帳前書」を、同九年には所謂「慶安御触書」や「六論衍義大意」を開板している。<sup>(51)</sup>佐渡でも、文政八年（一八二五）修教館が創設されて、旗本・御家人以下の入学を許し、武士・庶民の別なく聴講させたが、<sup>(52)</sup>通学以外に寄宿もあった。

諸藩の場合、郷校などの設立は幕府領に先行するようで、全国的に著名な岡山藩の閑谷学校は、寛文八年（一六六



学で、本藩の朱子学とは対照的かつ独自性がみられる。なお、多久氏は、文化九年（一八二二）領内の上田・笹原に、安政六年（一八五九）には志久に、それぞれ学舎名を冠した郷校を設立している。また、同藩の家老神代氏も、文久年間（一八六一―三）に領内の飯田・川久保に教導所・郷学校を建て、他方、本藩主も天保十年（一八三九）佐賀・伊万里に教導所を設けている。<sup>(58)</sup>

〔鹿児島藩〕 ここでは鹿児島城下集住の武士数八〇〇〇人に対して、地方の外城中心の郷村居住の武士（郷士）数は約一〇倍の八万余人におよぶ。城下と特定島嶼以外の全領域を一一三の外城区（藩の直轄領が九二カ郷、私領二一カ郷）に分け、地頭（直轄領支配）と領主（私領支配）が治める。同藩の場合、多数の郷士の教育機関として郷校が設けられ、庶民教育は後景に追いやられているといつてよい。島津斉彬は一郷一校の郷校設立案を持っていたが必ずしも実現せず、著名なものとして垂水の文行館、加治木の育英館、宮之城の盈進館など、十数校を数える程度である。郷校での成績優秀者は、城下の造士館に入る制度もあって、明治四年（一八七二）の同藩学制改革の時、本学校（造士館）―小学校（鹿児島）―郷校の制に統一された。なお、文行館は安永五年（一七七六）の創立で、漢学（孝経・小学・四書・近思録・諸子百家の書など）を中心とし、造士館の風に倣ったといわれる。<sup>(59)</sup>

〔高知藩〕 ここでは安政年間（一八五四―九）、安芸・香美・高岡・幡多の四郡に郡役所付属の学校を設立し、地方在住の藩士・郷士の教育の場にあてられたが、他方では家老の五藤・伊賀・深尾の諸氏が、それぞれ独立の郷校を建てて、自己の家臣教育を推進していた。例えば、深尾氏が安永元年（一七七二）設立した名教館など、一藩校に匹敵するほどの規模のもので、教科内容も儒学（朱子学や古学）以外に、医学・書道・算法・習礼・軍学、それに槍術・剣術・弓術・馬術・炮術などが加えられている。<sup>(60)</sup>

このようにして、藩校の下にあって「小さき藩塾」とも呼ばれた郷学や教諭所は、武士・庶民の教育機関として機能し、その教科内容からしても近代化への途を歩みはじめていた。例えば、阿波の志手原郷学校では、四書・五経の

ほか『大和小学』『世界国尽』『窮理図解』を、藍本郷学校では『西洋事情』『民間格知問答』を付け加え、出石藩郷校では『商売往来』『世界国尽』とともに、『大和小学』『但馬考』『国史略』を教科書に採用、福山藩の啓蒙所では四書・五経を廃して『生産道案内』『明倫撮要』『世界国尽』『万国歴史』をもつてするなど、実科主義的な教育が展開されるに至っている。また、郷校が幕末明治初期には寺子屋に代わって発展の極に達し、維新政府の新学制の下、小学校と改称して再生したことも、その歴史的位置づけを明確にするものである。<sup>(61)</sup>

### 三 下級武士・豪農商等による教育機関

―下からの途の栄光と、その挫折―

#### a 私塾

私塾は、官公学に対比した言葉であるが、その定義はむずかしい。幕府の官学、昌平坂学問所の前身が林羅山の家塾的性格をもち（忍岡私塾）、正式に官学として制度化されるのが寛政年間（一七八九―一八〇〇）であることは、既述のとおりである。藩校もまた、公立の学問所として制度化されるまでは、家塾的性格が濃厚であった。例えば、尼崎藩の場合、正徳元年（一七一二）松平氏の治政となつてから廃藩置県まで、その教学は古文辞学（徂徠学）派で、学問・思想の自由を保持し、同学派独特の勤王思想を体现したのも、半公半私の家塾制度を持続させたからだといわれている。したがって、塾主の主体性がつよく、幕府などの学問的抑圧がおよばなかったのは、明治元年（一八六八）まで正式の藩校を設立しなかったからである。<sup>(62)</sup>

こうしたわけで、私塾は、官公立の学校が未発達なときには封建教学を実質的に担うものであり、その代替物であったといつてよい。伊藤仁斎の古義堂や中江藤樹の藤樹書院など、その典型例である。しかし、官公立の学校が充実

してくると、私塾はその周辺、空白を埋める役割を果たす地位に追いやられるようになった。はじめは官公立の学校で重要視されない洋学や国学、さらには異端視された陽明学なども取扱うのが私塾だったのであり、まさに私塾の眞の存在価値はそこにあるといっても過言ではない。菅茶山の廉塾や広瀬淡窓の咸宜園以下の教育が、これにあたる。そして幕末期には、国際的環境や国内政治情勢の緊迫化にともない、官公立の学校体制を補完・代替する役割に甘んじることなく、封建教学の批判から一歩進んで、幕藩体制の支配構造そのものを批判する政治結社的な性格をもつ私塾が出現した。この先駆けが大塩中斎の洗心洞塾で、僧月性の時習館や吉田松陰の松下村塾などは、その代表例といえよう。<sup>(64)</sup>

こうした傾向は、私塾が、その設置・運営面で民間人の手にゆだねられ、教育内容や学習形態においても自由であり、幕藩領主による格別の干渉をあまり受けることなく、自由に塾の開設・廃止ができたことに助長された側面がある。その教育目的が、修身齊家・治国平天下を眼目とする儒教的な道德性をもつ人材の育成、換言すれば人格修養を基本とする国家・社会の有用な人材を創出するという点では、官公立の学校と何ら変わるところはないが、しかし大きく異なるところは、特定の幕藩制のかつ為政者のな人間形成ではなく、そうした枠組を逸脱した、自由で幅ひろい人間形成をめざした点である。<sup>(65)</sup>

私塾の設立数は、近世初期から中期までは比較的僅少で、藩校が多く設立される寛政年間（一七八九—一八〇〇）に急増の傾向を示す。もともと、それは寺子屋数の約一〇パーセント程度で、寺子屋の卒業者が私塾に進学することを示唆している。教師は武士が圧倒的に多く、約七五パーセントを占め、残りは町人その他で、大都市では女性も若干数ふくまれる<sup>(66)</sup>。生徒は、はじめは武士のほか、村役人クラスの豪農や商人、僧侶・神職・医者などの子弟であったが、幕末期には中貧農層のそれも入門するようになった。私塾は、漢学塾・国学塾・洋学塾に三類別されるが、ほかに医学・算学・武芸・宗教・趣味などの諸塾も少なくない。<sup>(67)</sup>ここでは、前三者について瞥見しておきたい。

◇漢学塾：これは儒学中心のもので、数的には圧倒的に多い。特に、陽明学を標榜する大塩平八郎の洗心洞塾、伝統的な朱子学から出発してその範疇をこえた水戸学派の私塾（藤田幽谷・東湖の青藍舎、会沢正志斎の南街塾など）、倒幕論の先駆けといわれる僧月性の時習館、そして公武合体論から討幕論へと政治理論を發展させた松田松陰の松下村塾、等々。<sup>(68)</sup>これらは近代日本の夜明けをつげる革新的な教育をした代表例で、私塾の特徴を最もよく示すものである。

これとは若干趣きを異にする、九州山間部の盆地で天領豊後日田の豪商広瀬久兵衛の兄、淡窓が文化十四年（一八一七）に開設した咸宜園の教育を見てみよう。この塾は、安政三年（一八五六）淡窓の没後、さらに九代の塾主を経て明治三十年（一八九七）に廃絶するまで八〇年間、その先行期を加えると前後九二年間継続した。来学者は全国六四カ国より四六一七名、淡窓時代だけでも二九一五名にのぼる。<sup>(69)</sup>この数値は、広瀬家に伝存する「入門簿」による累計であるが、在塾者数では近世において最大規模で、他の遠くおよぶところではない。入門者は武士・僧侶・医者・商人・農民・神職などであるが、その教育は徹底した実力主義をとり、人口に膾炙した「三箚法」、すなわち年令の大小、入塾前の学歴、身分や家柄をすべて無視し、塾中における学習活動の成果と課程の高下を問題にし、等級表のランクの上下で尊卑の順序をきめる、という方式をとった。<sup>(70)</sup>これは四民平等、能力主義の教育方針を示すもので、まことに近代資本主義の理念に合致するものといつてよい。<sup>(71)</sup>しかも、それは淡窓が町人身分の出自であることも無関係ではないが、その著『約言』のなかで「聖人ノ教、敬天ヲ主トスル」という立場、すなわち「天」という超越的主宰的な存在と自己との結びつきを常に意識し、それによって自己を反省する立場を堅持した<sup>(72)</sup>ことにもとづくものであるう。

◇国学塾：本居宣長の『古事記伝』によって大成された国学は、彼の私塾である鈴の屋塾が中心であったが、その入門者の多くは直接来学せず、書状による通信教育によって師弟関係を維持したためか、入学金や謝礼金が比較的少

なく(私費で来学、寄宿した場合は全体として高い経費となる)、このため急速にその教圏を拡大した。そして、数百名にのぼる鈴の屋門下の人びとは早くから社中を結成し、さらに全国各地で積極的に教育活動を展開した。それらの門人は、上級武士や豪農商層の者が多いというが、文無し同然の貧乏学生の苦学例もあって、その出自階層は幅広くとみるべきであろう。<sup>(13)</sup>

◇洋学塾：洋学は、はじめ蘭学と同義語であったが、幕末開港後は英・独・仏の学術を包括する用語となった。『解体新書』で有名な杉田玄白は、安永年間(二七二―一八〇)江戸の小浜藩邸で三又塾を開いたが、前野良沢もまた天眞楼塾を経営、ここで勉強した大槻玄沢は江戸の材木町に芝蘭塾を設けた。芝蘭塾の「門人帳」によると、寛政元年(一七八九)以降、三八カ国より九四名が来学しているが、実数はもつと多かつたらしい。長崎では、文政六年(一八三三)来日した商館医シーボルトの鳴滝塾において、医学以外に周辺諸科学が教えられ、高野長英・小関三英らの著名な蘭学者を輩出した。塾生は九州・中国・四国の者が六六パーセントを占め、東北地方からの入塾者もいた。緒方洪庵の大坂の適塾は、弘化元年(一八四四)より元治元年(一八六四)まで、六九カ国・六三七人が来学している。蘭学も、しだいに兵学が重視されるようになり、長崎の砲術家高島秋帆の家塾や伊豆の代官江川英龍の葎山塾などが有名であるが、特に後者は家臣に砲術を授け、その門下実に四〇〇〇人の多きを教えた(その大半は諸藩からの公費留学生という)。万延元年(一八六〇)アメリカより帰国した福沢諭吉は、のち慶応義塾を開いたが、そこでは幕藩体制を打倒して新秩序を樹立しようとするまではせぬところに、洋学者一般の特性をよく代表していた。<sup>(14)</sup>

#### b 寺子屋

寺子屋の起源は中世中期にまで溯るが、これが全国的な普及するのは近世中期であって、特に天和―正徳期(一六一―一七二五)、天明・寛政期(二七八―一八〇〇)、天保・弘化期(一八三〇―四七)の三時期に開設の増加が顕著で

あるといわれる。<sup>(75)</sup>『撰陽奇観』には、宝暦年間（一七五一—一六三）大坂市中に寺子屋二五〇〇人、ここで学ぶ寺子は約七万五〇〇〇人と記されているが、寛政以降に著しく増加して全国で四五万人以上にのぼるとの推算もある。

これでは寺子屋の経営者（師匠）の質的变化をもたらすのは当然で、当初は僧侶・武士・牢人に町人・農民が加わり、<sup>(76)</sup>さらに神職・医者などを交えて多彩となる。地域的には、大都市では町人が圧倒的に多く、農村では農民・僧侶といった具合であるが、この場合の農民とは村落支配層の者であって、封建領主の内意をうけて一種の慈善事業や経済的補助のために寺子屋を開く例も少なくない。

その教科内容は、もともと手習を主としたが、後にはこれを手段として人倫道德や公民的訓練を施す傾向がみられた。<sup>(77)</sup>具体的にみれば、そこでは読み・書き・算術といった庶民生活上に必要な知識・技術の伝授であるが、さらには五倫（親・義・別・序・信）と五常（仁・義・礼・智・信）といった儒教道德的な人間形成が根底にあったのである。<sup>(78)</sup>江戸幕府も、八代將軍吉宗が享保六年（一七三二）『六論衍義』を荻生徂徠の訓点つきで刊行、さらに翌年には室鳩巢に命じて和解をつくり、『六論衍義大意』と題して出版させるとともに、これを江戸町奉行に命じて手習師匠にあたえ、寺子屋の教科書として使用させている。大坂町奉行もこれを倣い、諸藩もこの書を刊行して寺子屋の教科書にあてることが多かったという。天保十四年（一八四三）幕府は、これも江戸市中での寺子屋の教科・訓育方針を定め、高札の文面や御触書、庭訓もの・実語教・大学・小学、女性には女今川・女誠・女孝経などを教えるよう命じているが、<sup>(79)</sup>どの程度徹底したかは明らかでない。

ここでは江戸近郊の中山道蔵宿の場合を見てみよう。この地は大都市江戸と城下町とを結ぶ中継点、また周辺農村の中心的存在という性格をもつが、寛政元年（一七八九）以降の旅籠屋日記を見ると、寺子屋の発達ぶりがよくわかる。そこでは、幕府の御家人の子弟や牢人、僧侶・商人などが寺子屋の師匠として名をみせ、寺子一二〇人を抱える者もいた。寛政期をすぎると、寺子屋関係の記事がなくなり、天保期に再び活発化の傾向がみえるが、この場合は蔵

宿の名主や他所からの寄留者が師匠となっており、特に幕末・維新期には、蕨宿では名主・豪農・医者・僧侶、周辺農村では名主・豪農・僧侶が師匠を兼ねている。寺子は、宿村役人や大小商人・職人・農民、それに他村の者などで、中流以上の階層の子弟はほぼ包含されるが、下層のそれも一定程度これに加わるとみて差支えない。幕末期には、女子の寺子数の増加が目につくが、それでも全体の一〇パーセント程度であつて、維新期に俄然倍增する。<sup>(80)</sup>

蕨宿の寺子屋の教科書は、読書用として実語教・今川・庭訓往来・三字経・四書・五経・唐詩選・左伝など、習字用に、いろは歌・近郷村名・江戸方角・国尽・都路・消息往来・千字文などを使い、算術には加減乗除・開平開立その他を教えた。<sup>(81)</sup> 寺子屋の教材として四書・五経などは、ある程度高級な授業内容であるが、これは蕨宿が大都市江戸に近く、すぐれた師匠の来住に恵まれたこともあるが、さらには交通・流通の一拠点として経済的發展が著しく、特に文政・天保期から近代的な産業のひとつ、木綿織のマニユファクチュアが展開しはじめる段階にまで到達していた事情を考慮すべきであろう。<sup>(82)</sup> また、この地で、女子の寺子数が比較的多いのも、これらと無関係ではないと考えられる。このようにして、農村内での商工業の發展の行きつくところ、その新しい近代化への波は、一般庶民のあいだに日常生活・生産活動への学問・教育の必要性を認識させ、ひいては女子教育の伸張を促したのであった。

### C その他

以上の官公私立の各教育機関に対して、民衆のあいだには多彩な社会教育の場が用意されていた。例えば、幕藩領主などの政令（高札・触書・教諭書・五人組帳前書など）や町村規定（町規約・村規定など）、家訓や教訓類、武芸以下の文芸・演劇・美術工芸・茶の湯・插花などの趣味におよぶ諸芸、町村の諸講（宗教・経済・労働・教育・娯楽上の講）や諸組（若者組・娘組・子供組など）がある。さらに、民間の社会教育運動として、心学（石門・藤樹の両心学）、二宮尊徳の報徳教、大原幽学の改心楼、不二孝などがあげられる。<sup>(83)</sup>

このうち、石門心学は、石田梅岩の出自に示されるように、武士階級とは異なる町人意識に立脚し、年令・性別・階級・職分と無関係な商品経済の社会、すなわち近代的市民社会を旨とするものとなったが、中江藤樹による心学もまた、農村指導層による精神運動として近代的傾向を示した。尊徳は、幕末期の農村復興の手段として報徳運動をおこなしたが、明治に入ると興復社・報徳会・報徳社などとなり、地方改良運動や農本主義の思想的支柱として、近代社会教育の中核的役割を担うようになった。また、幽学も、同時期の能生村衰頹のなかに、改心楼を中核的拠点として性理学を説き、実践的な農村社会改造により近代化への基礎をきづいた。不二孝は、中世末期から近世初期にかけて角行東覚による修験的色彩をもつ民間信仰としての富士講にはじまるが、元禄年間（一六八八—一七〇三）の食行身縁によって自己変革をとげ、四民平等・男女平等論を展開する近代教育への方向に歩を進めた点に重要性がある（それは後、小谷三志による「改心革行」「村改造」の不二道へと推転する<sup>(84)</sup>）。

#### 四 近代的学校制度の施行と在地の動向

— 埼玉県蕨郷学校の変遷を事例として —

明治二年（一八六九）六月、維新政府は、旧幕府の昌平校・開成所・医学所を総合して大学校（次いで大学）と改称、これを教育行政機関の機能をもたせて、府藩県の教育を監督させ、翌三年二月には大学一カ所と府藩県にそれぞれ中・小学を置くこととし、「大学規則並ニ中小学規則」を制定したが、これは諸藩に強制力をもつまでには至らなかった<sup>(85)</sup>。それが徹底するのは、同四年七月の廃藩置県と大学廃止ならびに文部省設置、五年八月の「学制」発布によってである。このうち、廃藩置県は、旧来の藩校に大打撃をあたえ、旧藩主の東京移住等により閉・廃校となるか（約六〇パーセント強）、有志家の私立学校または新置の県の中学に転身するほかなかった。また、新「学制」は、旧藩の教育機関すべての廃止—旧藩校のみならず、郷校・寺子屋まで—を命じる一方、公立の小学校の設立を奨励し、中学校

教育への助成をせぬ方針を打ち出した。<sup>(86)</sup> 中学校が増加の傾向を示すのは、その三年後である。なお、同十一年には、府県会・地方税の各規則を發布し、府県立の学校経費は地方税をもって支弁し、区町村立の学校は人民の協議に委ねるとしている。

このような趨勢の下で、在地の郷学校・寺子屋がいかなる変遷をみたかを、先の蕨宿の場合を例にとって瞥見してみよう。<sup>(87)</sup> 幕府の倒壊により徳川慶喜が駿府城に遷ると、蕨宿方面で教えていた旧幕臣の儒者たちもこれに随い、このため寺子屋も閉鎖のやむなきに至ったものが多い。そこで、蕨宿と周辺農村の名主・豪農たちは協議して、もと江戸城黒書院で將軍に儒学を進講し、のち工銃隊操練教授をつとめ、北海道箱館の五稜郭で最後まで官軍に抗戦した後、いまは恭順・謹慎中の石川直中なる人物を招聘して、同三年に蕨郷学校を設立した。これには新政府の浦和県令野村盛秀も金二五両ほどを拠出している。これによれば、蕨郷学校は、近世の寺子屋ないし私塾の継承・発展という側面をもち、その形式は私立であって前記の郷校(二のC)の①ではあるが、部分的に②の性格を併せ持つものであることを示唆している。教科内容は、読書・習字・算術・英語である。ところで、蕨宿などでは、石川をこの地に定住させるべく公立の郷学校設立の気運がおこり、蕨宿下蕨に彼の居宅と校舎を新築、埼玉県二十三区郷学校(県第二郷学校)として、同五年三月開校の運びとなり、野村県令以下の役人も列席したが、この郷学校では石川以外に蕨宿と近村の名主・豪農・医者などが小学・孟子・孝経・日本外史などを講義している。

同年八月、明治政府が新「学制」を施行して、従来の私塾・寺子屋などでの授業を禁じたことは前述のとおりであるが、その代替措置として又、今後はすべて小学所で児童教育をさせるので、宿村の有志が拠金して小学校を設立するように、と命じている。蕨郷学校も、全国的な学制に沿うかたちで新出発したのであるが、その生徒らは当初、蕨宿と近村以外に、東京や千葉県からも集まったという。しかし、蕨郷学校は、その後は分散↓統一の過程をへて、明治十五年(一八八二)蕨町立顕神学校となるが、それは蕨郷学校が前記の①ないし②の経営形式から③のそれに移行

したこと、その間の分立・統一の過程こそが、近代教育発達の第一段階での苦悩のなかにも新出発の模索をつづける  
蕨宿民の姿だったのである。そして、それは激変する時代の波をいかに乗り切るかにつき、蕨宿の指導層が青少年の  
教育にすべてを賭けて懸命の努力をし、顕神学校の設立によって近代教育の基礎固めができたことを示すものである。  
しかし、この時期の蕨郷学校が「他村二・三校モナキ故、近隣ノ村ヨリ来リ習ウ、然シ有志ノ者バカリ、今日ノ如キニ  
アラズ、多ク資産家ナリ」（『雑誌見聞録』）という点に、問題の本質がかくされている。

他方、蕨宿の周辺諸村でも相次いで学校建設の気運がおこり、各村ごとにその実現をみるに至った。注目すべきは  
塚越村の場合であって、ここでは有力な機業マニユファクチュア主の高橋新五郎、数十人の下男・下女を使役する油  
屋源六、村役人の村田彦四郎ら豪農層の主導の下に学校建設が実現していること、これら指導層が近代化推進のひと  
つの鍵を学校教育に見出すなど、一般村民とは時代認識がちがっていたこと、その背景に各村内において新たな階層  
分化の進行がかなりの段階にまで到達していたこと、等々が看取されるのである。

これは何を意味するのであろうか。文政・天保期より農村におけるマニユファクチュア経営発展の担い手として、  
下からの資本主義化の途を歩みはじめ、しかも幕末開港による経済激変の苦難を乗り越えてきた高橋ら豪農層は、維  
新後は明治政府の上からの資本主義化政策に直面して、再び困難に遭遇したのである。有名な自由民権運動は、西南  
雄藩の板垣退助らによって始まったが、まもなく豪農層主導の民権運動にとつて代わられた。豪農層は、全国各地で  
政治・経済・法律・思想・文学・歴史などの活発な学習活動をおこない、経済的な結社活動、相互扶助的な連携など  
実に多彩であつて、これが政治的な行動へとすすみ、新しい時代の旗手たろうとしていた。<sup>(88)</sup>

これに打撃をあたえたのが、明治十四年（一八八二）大蔵卿松方正義のデフレ政策であつて、豪農経営は見事に行  
きづまり、土地を喪失する農民が続出して地主制が形成され、豪農民権も沈滞化したのである。このため、没落した  
貧農・小作層は過激化して、同十七年には群馬・秩父事件などを起こし、特に秩父事件では、これら貧民からなる借

金党・困民党が高利貸からの救済、学校費節減のため三カ年の休校と、国税・村税の省減を要求した。当時、学校は義務制でありながら授業料が高く、このため学校への憎悪激しく、その打ちこわしが早くから頻発していた。<sup>89</sup>これは当時、山形県においても、支配層からすれば「細民貧人ハ其費二堪ヘザルニヨリ、猥ニ往古ノ寺子屋ト称シテ方今ノ画一教育ヲ嫌ヘ、己レノ義務ヲ悟トラスシテ却テ他ノ専制ヲ怨ム」といった具合であり、全国的に共通する傾向でもあった。かの塚越村の場合も、小学校建設にあたって一般村民（中・貧農）が「学校ナド拵エテ何ニナルモノカ、ア  
ンナモノハイラヌ」と拒絶反応を示したのは、そのためでもある。<sup>91</sup>こうした事情から、小学児童は義務教育制でありながら、初めの就学率二五パーセントと低迷をつづけたのは当然であるが、中央集権的な地方支配体制が確立した後の同三十五年には就学率九〇パーセントに達し、近代的教育制度もようやく軌道に乗ることになったのである。<sup>92</sup>

## 五 結びにかえて

以上、近世の幕藩制的な教学・教育機関のなかにも近代的发展の要素が内包されており、幕末期に至ると新たな洋学・国学の発展、さらには教育内容や同施設の充実・拡大がこれを増幅したが、他方、これら上からの近代化にかぎらず、下級武士や豪農商などによる下からの教育機関も発展して、幕藩制国家そのものを動揺させ打倒に導く原動力となったことが明らかとなった。明治政府の文教政策は、これら上、下両コースの近代化を徹底的に改編、遮断（特に下からのブルジョアの発展のそれを抑制）することを通じ、近代的教育制度の在り方に一定の特質を付与したのである。ここでの特質について述べておきたい。明治政府は、工業の例では官営工場、さらに三井・三菱など政商の保護など、上からの資本主義化を推進する一方、地方の自生的資本主義の発展には制約を加え、しかも地主制を形成する政策をとった。このことは、中産的ブルジョア層の相当程度の欠如をもたらすとともに、貧農・小作層を増加させ、都

市と農村の有機的統一を妨げる一因となった。近代的教育制度の一大支柱は、組織化された学校体系である。それは小学校→中学校→(旧制) 高等学校・専門学校等→大学という階層序列をなすが、中・上級の学校へ進むほどに、都市の特定ブルジョア・知識層や地方の有力地主層出身者が多くを占め、下層出身者は高等教育をうける余地が狭められている。したがって、この学校体系にみる階層秩序は、安定したピラミッド型というよりはむしろ、丹頂鶴型をなすといつて差支えない。このため、その基底部をなす小学校や、その上の中学校における教育目的は、天皇制国家体制への絶対的忠誠(「忠君愛国」)におかれ、かつての封建的主従道德(「御恩と奉公」)の私的で相対的な忠誠心よりは遙かに強烈なものとなり、ブルジョアの自由や民主主義は後景に追いやられることになった。これでは、広範な国民階層から学問・研究を担う人材の吸収・養成に限界あるがために、欧米先進諸国の科学技術等におくれをとり、ついには太平洋戦争での惨敗という憂き目を見るに至ったのである。

そして、さらに付言すれば、他方、敗戦後の日本が驚異的といわれる経済復興と発展を成しとげた背景には、学問・研究の自由、国民諸階層への教育機会の均等化、すなわち上級学校への進学者の飛躍的増大と知的水準の一般的上昇がみられ、これが特定分野では欧米諸国に追いつき凌駕し、二度のエネルギー・ショックにも耐えうる要因の一つになったものと思われる。それは、中国大陸や朝鮮半島、台湾あるいは東南アジアの諸国が、日本の明治維新後の近代化や第二次世界大戦後の経済的繁栄に範をとる一方法として、例えば教学・教育制度を検討しようとする時、前述のような政治・経済・社会構造上の特質との関連を看過すべきでないことを示唆している。

### 〔註〕

(1) 小田康徳『日本近代史の探求』(一九九三年) 四頁。

(2) 社会経済労働研究所編『日本資本主義論争史』(一九四七年)・長岡新吉『日本資本主義論争の群像』(一九八四年)、ほ

か。

- (3) (6) 佐藤誠実編著『修訂日本教育史』(一九〇三年)三〇一頁。同上、三〇三―〇七頁。
- (4) 『正平志』二一・『聖堂事実記』。
- (5) 笠井助治「近世藩校に於ける学統学派の研究」上(一九六九年)七〇頁(以下、『藩校〈学統〉』と略記する)。
- (7) 清水茂「古学派」「古義学」(『国史大辞典』5)
- (8) 丸山真男「日本政治思想史研究」(一九五二年)一章。これに対する批判として、尾藤正英「日本封建思想史研究」(一九六一年)序章を参照。
- (9) 頼惟勤「折衷学」「考証学」(『国史大辞典』8・5)。
- (10) 笠井前掲『藩校〈学統〉』下、二〇五―二〇五五頁。
- (11) 佐藤前掲編著、三二四―一六頁、山本武夫「和学講談所」(『国史大辞典』14)、文部省編『日本教育史資料』巻七。
- (12) 『開成学校沿革取調書』・『洋学年表』・『嘉永明治年間録』。
- (13) 佐藤前掲編著、三二二―二四頁、渋沢栄一『徳川慶喜公伝』三。
- (14) (16) 笠井助治「近世藩校の総合的研究」(一九六〇年)二頁の「藩校創設年代一覧表」(以下、『藩校〈総合〉』と略記する)。同上、一五―二四頁。
- (15) 右同書では、藩校を私塾・家塾・講堂型の三類型区分をするが、筆者は前一者を合体した。
- (17) (18) 笠井前掲『藩校〈学統〉』上、七―七四頁。同上、七五頁。
- (19) 佐藤昌介「洋学史の研究」(一九八〇年)三―一六頁。
- (20) 笠井前掲『藩校〈学統〉』下、二二〇頁。なお、同著『藩校〈総合〉』は、全国二七二校のうち三八校とする。
- (21) 笠井前掲『藩校〈学統〉』下、二二〇頁・二二七頁、『萩市史』一。
- (22) 藤野保編『続佐賀藩の総合的研究』(一九八七年)八一―四七頁・九三六―四一頁、杉本勲編『近代西洋文明との出会

いー黎明期の西南雄藩一(二九八九年) 七六―一〇〇頁・二二九―六八頁、城島正祥・杉谷昭『佐賀県の歴史』(一九七二年) 一四〇―五六頁、笠井前掲『藩校〈学統〉』下、一六〇五―〇六頁・二二〇―二二頁。

(23) 原口虎雄『鹿児島県の歴史』(一九九三年) 二〇二―〇七頁、『島津国史』、笠井前掲『藩校〈学統〉』下、一九一八―二四頁。

(24) (25) (26) 笠井前掲『藩校〈学統〉』下、一四九五頁。同上、一四七六―七七頁・二二〇―二頁。同上、一七七六―七七頁・二二〇三頁。

(27) 平野邦雄・飯田久雄『福岡県の歴史』(一九七四年) 二二三―二三頁、『福岡県史』通史編・福岡藩・文化(上)(一九九三年) 三六五―七九頁。

(28) 高橋富雄『宮城県の歴史』(一九六九年) 一九〇―九三頁、笠井前掲『藩校〈学統〉』上、一五一―五二頁。

(29) 文部省編『日本教育史資料』巻四。

(30) 笠井前掲『藩校〈学統〉』下、二二〇三―〇四頁、印牧邦雄『福井県の歴史』(一九七三年) 一六三―六四頁。

(31) (33) 笠井前掲『藩校〈学統〉』二六三頁。同上、二六四頁。

(32) (36) (38) (39) 笠井前掲『藩校〈学統〉』上、二〇三―〇四頁・同上、四六七頁。同上、一五〇頁。同上、五二五頁。

(34) (35) (42) 笠井前掲『藩校〈学統〉』下、二〇九八―九九頁。同上、一五〇〇―〇一頁、『日本教育史資料』巻十二。同上、一〇七六頁・一八九四頁。

(37) (40) 笠井前掲『藩校〈学統〉』一八九―九〇頁。同上、一九一―九七頁。

(41) 佐藤前掲編著、四七八―七九頁。

(43) 『日本教育史資料』巻三。

(44) 笠井前掲『藩校〈学統〉』上、五六六―六七頁。

なお、静岡藩学問所の津田真道は、海外留学の第一回生で、幕府開成所教授。中村敬宇は東京帝国大学教授として、弟子

井上哲次郎・三宅雪嶺・岡倉天心以下の俊秀、明治文化の担い手を多く輩出させた(同書、五六九―七二頁)。

(45) (46) 右同書、五六六―六七頁。同上、五七三―七四頁、『日本教育史資料』巻二。

(47) 石川謙「近世の庶民教育」(『歴史教育』一〇巻二号、一九六二年)。

(48) (49) (52) 佐藤前掲編著、三一八―一九頁。同上、三一五―一六頁。同上、三一六頁。

(50) 拙稿「慶安御触書」論の推移とその存否をめぐって」(『近世近代史論集』一九九〇年)。

(51) (55) (58) 石川謙『日本庶民教育史』(一九七二年) 一四三―四四頁、松崎欣一「幕府代官山本大膳に関わる五種の法令・

教諭書類をめぐって」(『史学』六一巻二・三号、一九九二年)。石川同上書、一五三―五六頁の「郷学一覽表」。同上、同。

(53) 笠井前掲『藩校〈学統〉』下、一一八五―八六頁、石川前掲書、一四八―五一頁、特別史跡閑谷学校顕彰保存会編「閑谷学校」。

(54) (63) 笠井前掲『藩校〈学統〉』上、四六六頁。同上、九八六―八八頁。

(56) 三坂圭治「山口県の歴史」(一九七一年) 一八四―八八頁、海原徹「近世の学校と教育」(一九八七年) 二二三頁所収の

「萩藩の郷校一覽」、笠井前掲『藩校〈学統〉』下、一二七四―七六頁・一二九三頁・一二九九―一三〇〇頁。

(57) (59) (60) 笠井前掲『藩校〈学統〉』下、一六三―二四頁・一六三―三三頁。同上、一九四五―四六頁・一九二〇頁・

一九四八―五〇頁・一九四五―四六頁、『日本教育史資料』巻九。同上、一四九五―九六頁・一五二四―二六頁、『日本教育

史資料』巻九。

(61) 石川前掲書、一六三―七九頁。

(62) 海原前掲「近世の学校と教育」は、封建学校の典型としての藩校がいかに門戸開放を徹底しても、その延長線上に近代学校は導き出せぬ、藩校がいったん廃絶される以外に近代学校の誕生はなかったとして、明治五年の「学制」実施が旧藩時代の全教育機関の一斉閉鎖を強行することにより陽の目をみた、と述べている(同書、七七頁)。筆者は、封建教学やその研究・教育機関(幕府の昌平坂学問所・開成所・医学所、藩校・郷校など)そのものの中に近代化の方向性がうまれ、その基

礎の上に、いったん閉鎖の憂き目をみながらも近代的な大学、中小学へと再編されていった側面を重視すべきであると考えられている。この点は、教育におけるブルジョア革命性の評価にかかわる問題でもあろう。

(64) (65) (66) (67) (68) 海原徹『近世私塾の研究』(一九八一年) 一一―一二頁。同上、一三―一四頁。同上、二二頁。同上、二二―三三―三四頁。同上、三〇九―六一頁・四一一―九九頁。

(69) (70) (72) 井上義巳『人物叢書・広瀬淡窓』(一九八七年) 二〇六頁。同上、七一―七五頁。同上、二三九―四七頁。

(71) (73) (74) 海原前掲書(註64に同じ) 五一―七二頁。同上、二二―八四頁。同上、一九九―三〇八頁、洋学史研究会編

『大槻玄沢の研究』(一九九一年) 一三―二四頁、仲田正之『人物叢書・江川坦庵』(一九八五年) 一四一―四二頁・一六六頁。

(75) 石川松太郎『藩校と寺子屋』(一九七八年) 一四六―四八頁。

(76) 原田伴彦『元禄文化』(岩波講座『日本歴史11』一九六三年)。

(77) 石川謙前掲書、二一五頁。

(78) (79) 笠井前掲『藩校〈学統〉』上、七六頁。同上、七六―七七頁。

(80) (81) (82) (87) 拙稿『蕨市の歴史』二卷(一九六七年) 九四―四五頁。同上、九四五―五一頁。同上、八八六―九三六頁。同上、九五―一五八頁。

(83) (84) 大槻宏樹『近世日本社会教育史論』(一九九三年) 二九―五五頁の「近世『社会教育』認識の研究取扱表」。同上、七―一〇頁・一四五―六二頁・二一〇―二六頁・二九七―三一〇頁。

(85) 佐藤前掲編著、四八二―八三頁。

(86) 本山幸彦編著『明治前期学校成立史』(一九六五年) 八―一六頁。例えば、三河国の豪農古橋暉児と懇意な佐藤清臣のように、明治政府の学制整備に反発し、改めて私塾をつくり自己流の教育を施した者もいる(芳賀登『幕末志士の生活』一九

八二年)。

(88) 小田前掲書、一七―一八頁。

(89) 江袋文男『秩序騒動』(一九五〇年) 四〇頁所収文書、土屋忠雄『明治前期教育政策史の研究』(一九六二年) 一五七―五九頁。

(90) 荒井武編『近代学校成立過程の研究』(一九八六年) 九三〇頁。

(91) 前掲『蕨市の歴史』二卷、九五七頁。

(92) 海後宗臣『小学校』(『日本歴史大辞典』5)。

〔付記〕拙論は、七月二十五日(日)、インドネシア国パラジャラン大学で開催された第六回全インドネシア日本研究大会における報告(要旨)のための基礎原稿である。インドネシア大学大学院への訪問講義の際、イダ博士より突然発表依頼をうけたため、同大学や日本から取りよせた資料によりながら、授業の合い間をぬい半カ月間を要して作成した。まったく専攻外の者の思いつきの粗論であるが、熱心な質疑応答など思い出深いものがあり、あえて活字化した。

(一九九三・一〇・三〇)